

これらの先行研究では、太田の業績と時代との関連、とくにその中国研究の日本民俗学についての意味などについて、まだ十分な分析に至っていない。

本章は、太田の『兵庫県民俗資料』から『近畿民俗』を中心とした活動、及び軍人として中国に赴いた後に『旅と伝説』や『民間伝承』に寄せた報告や通信などから、太田が郷土の先覚者から日本の民俗学者に変わる経緯、及びその中国経験の意味を検討する。

1 郷土史から日本民俗学へ

1 太田陸郎（おおた・ろくろう）⁽⁴⁾の略歴

一八九六年八月、六男として、夢前川上流域の兵庫県飾磨郡置塩村の役所所在地糸田に生まれる。父・名倉次は柳田の長兄松岡鼎と御影師範での同窓の友人であり、地元姫路で自由民権運動を展開し、県議会、衆議院議員、県と郡の農会会長などを歴任した名士である。

一九一一年、地元の名門校である兵庫県立姫路中学校（兵庫県立姫路西高等学校の前身）に入学し、寄宿生活を送り始め、キリスト教徒になる。

一九一六年、二七期生として卒業し、京都のキリスト教系の同志社大学政治経済部⁽⁵⁾に入学する。考古学に強い関心を示す。

一九二一年、法学部経済学科を卒業⁽⁶⁾し、四月に株式会社富島組に入社した。富島組は一八八四年に大阪商船会社専属運輸会社として設立されたもので、本部は大阪にあり、当時神戸、東京、若松にも支店をもち、国内外にわたる港湾運送事業を展開していた⁽⁷⁾。

同十二月、一年志願兵として福知山工兵隊⁽⁸⁾に入隊し、一九二三年三月除隊して富島組に復職したが、健康を

害して九月に退社帰郷することになる。その間、一九二三年一月に、揖保郡網干町（現、姫路市網干区）興浜の太田勝治の養嗣子となる。

一九二四年七月、兵庫県庁学務部社会課社会事業主事補となり、地方公務員生活を始める。

一九三三年、県史跡名勝天然記念物調査事務が囑託され、また県史調査員として活動し、内務省より就労統制員にも任命される。

一九三六年四月、主事となり、新設の学務部職業課に勤務する。

一九三八年七月には召集に応じ、陸軍少尉として武漢作戦に参加し、中尉に昇進する。その後中国の華中地域を中心に軍隊生活を送っていた。

一九四二年、内地帰還が決まったが、南方戦線に志望転出し、数ヶ月マレー半島で勤務する。

同十月二九日、シンガポールより日本へ帰任する途中、台湾上空の事故で遭難する。陸軍大尉、正七位勲五等が贈られる。

2 太田陸郎の業績

県庁勤務以前の太田の業績⁽⁹⁾については、卒業論文をベースとした「播州土師の竈址と寺址」（署名は名倉陸郎、『民族と歴史』六一三、一九二一年九月）以外、遺された資料が少なく、その詳細を明らかにすることはできない。県庁での仕事については、たとえば二〇〇三年に刊行された資料集『日本近代都市社会調査資料集成第六集―神戸市社会調査報告書（含兵庫県）』（近現代資料刊行会編）に、一九一八―一九四三年に刊行公開した神戸市と兵庫県の社会課を中心とした諸部局の調査報告が集められており、そこから太田の仕事の一角を窺うことができる⁽¹⁰⁾。

県庁での忙しい本職以外、太田は多くの研究や発表を行っている。管見の限り、太田の新聞雑誌への投稿は一九二七年に始まったようである。この年の八月十四日付『大阪朝日新聞神戸版』に「俺が村の盆踊」を寄せており、

また『神戸詩歌』の八月と十一月号にも「民謡礼讃」と「播磨古民謡抄」を発表している。一九三八年中国に赴くまでの投稿は主として『民俗芸術』、『考古学』、『兵庫史談』、『兵庫県民俗資料』、『近畿民俗』、『旅と伝説』などに集中している（表9参照）。

この中で、太田が深く関わったものは『兵庫史談』と『兵庫県民俗資料』（図4）であるが、特に後者に対して柳田は「太田君の事業は、まだ此外にも幾つか残つて、我々の学問を益して居る。兵庫県民俗資料といふ数年間の雑誌などは、大部分がこの人の努力の痕であつた」と高く評価している⁽¹¹⁾。創刊号（一九三二年五月）の「編輯雑誌」によれば、雑誌の創刊に最初に関わったのは河本正義、川辺賢武、桜谷忍であり、太田はその席上には居合せなかったが、「こうした企画からは離すべからざる関係にある」から「発起人の一人」にきめられ（桜谷）、しかも雑誌の「兵庫県民俗資料」の題は、太田さんが名付親」（河本）であつた⁽¹²⁾。

『兵庫県民俗資料』の初期の同人は他に福橋茂樹と宮武省三がおり、翌年には五十崎夏次郎、川島右次、鷺尾三郎も加わり、一九三五年まで合計十八号を発行した。当雑誌は「兵庫県の民俗文化を総合的に解明すべく企画されたもので、郷土を識る手掛かりとしてその利用価値は非常に高い」「にもかかわらず、現在では入手が甚だ困難」⁽¹³⁾。そのため、一九八二年国書刊行会より合本二冊として復刻された。太田の積極的な姿勢は、全十八輯の中の十五輯に対して四〇本近く投稿している（表9参照）ことから窺えよう。

現時点で確認できた太田の編著書は以下のとおりである。

- 一、『播磨民謡攷』一九二九年八月、太田陸郎
- 二、『兵庫県下百姓一揆史話』一九三〇年九月、太田陸郎
- 三、『新注 峰相記微考』一九三二年六月、兵庫県民俗研究



図4 『兵庫県民俗資料』創刊号
（1932年5月）表紙

会

- 四、『兵庫県下百姓一揆関係史料解題』一九三二年十二月、太田陸郎
 - 五、『兵庫県下の五人組制度に現はれる道德律』一九三三年、太田陸郎
 - 六、『絵本大和詩経』一九三三年八月、清文堂書店
 - 七、『稿本播磨鑑（二）』一九三三年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 八、『朝鮮人來聘一件』一九三四年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 九、『宗門家数人数改目録』一九三四年十一月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十、『兵庫県金石年表』一九三四年十二月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十一、『稿本播磨鑑（一）』一九三五年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十二、『吉備見聞落穂集』一九三六年、太田陸郎
 - 十三、『但馬出石焼窯元古文書』一九三六年十一月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十四、『支那習俗』一九四三年、三国書房
- 手稿一、『考古備忘録』（一九二八年丹波アサカ塚調査記録）

二、『禁札考』（年代不明）

なお、『西讃府志綱干之部抄』、『利神城由来』（一九三三年）、『姫路城隸郡二十四孝廉伝』（一九三四年）などの復刻出版に関わったことも確認できた。

編著書以外の投稿についても、太田は役所勤務の傍らとはいえ、実に数多くの業績を残していることがわかる。その業績を時期と内容から考えると、以下の四点が指摘できよう。

まず、一九三五年頃まで、太田の主な関心は播磨を中心とする兵庫県下の郷土史料の収集、校訂、注釈、解説、

表9 太田陸郎投稿略表（一九二八～一九三八年）

『民俗芸術』月刊／一九二八年～一九三三年／地平社書房→民俗芸術の会
一九二八年
「播磨の昔踊」『民俗芸術』一一八
「酒造業者の歌」『撰州灘五郷』『民俗芸術』一一二
一九三〇年
「播磨書写山の追儺」『民俗芸術』三一二
「摂津長田神社の追儺」『民俗芸術』三一三
「網干音頭」『民俗芸術』三一八
「美田八幡宮の神の相撲」『民俗芸術』三一九
「くつ草鞋とつまご草履」『民俗芸術』三一九
『考古学』隔月刊／一九三〇年～一九四一年／東京考古学会
一九三〇年
「丹波アサカ塚踏査略報」『考古学』一一一
一九三一年
浅田芳郎と「但馬出石神社」近傍発見蔵骨器『考古学』二一三
「有鰭埴輪円筒」『考古学』二一四
一九三二年
「神戸市の史前遺跡」『考古学』三一二
『兵庫史談』月刊／一九二六年～／神戸史談会
一九三二年
「播磨古瓦譜」『兵庫史談』一一四
一九三三年
「播磨鑑の草稿本と其著者平野庸修」『兵庫史談』二一三
「兵庫県下刀匠雜記」『兵庫史談』二一六
一九三四年
「池田輝政検地の一史料」『兵庫史談』三一九

出版に集中していた。編著出版書のほとんど、及び『兵庫県民俗資料』の多くの論考はこれに入る。実は多くの編著書の出版元である兵庫県郷土史料刊行会と『兵庫県民俗資料』の主体である兵庫県民俗研究会は住所が同じであった。

次に、郷土史を明らかにする手段として、太田は郷土史料の蒐集と並行して考古学にも興味を持っていた。たとえば『考古学』への一連の投稿や『兵庫県金石年表』などの研究がそのことを示している。

太田は民俗学的事象について早い時期から関心を示している。表9を時系列で見ると、初期の論考はもっぱら民謡に集中していたが、次第に出身地付近の民俗、たとえば糸田のすぐ南にある曾左村の追儺儀礼（播磨書写山の追儺）『民俗芸術』一九三〇年）、置塩村の牛の民俗（牛に関する方言と俗信（播磨飾磨郡置塩村付近））『兵庫県民俗資料』一九三二年）、夢前川の漁獲習俗

「兵庫県金石年表」『兵庫史談』三一—一九三五年

「兵庫県金石年表補遺」『兵庫史談』四—一

「摂津壳布神社発見銅鏃」『兵庫史談』四—三

「有馬郡道場に於ける石剣の発見」『兵庫史談』四—七

「高田屋嘉兵衛関係史料」『兵庫史談』四—八

「兵庫津明細帳抄」『兵庫史談』四—九

「兵庫津北濱会所古文書」『兵庫史談』四—一

「天明七年兵庫津打潰」『兵庫史談』四—二

一九三六年

「石峯寺記録」『兵庫史談』五—三

「神戸妙法寺村年中行事」『兵庫史談』五—四

「兵庫津、慶長・寛政地子その他に就いて」『兵庫史談』五—六

「但馬出石焼窯元古記録（一、二）」『兵庫史談』五—一〇、五—一一

「遠州引左郡滝沢村記二」『兵庫史談』五—一一

一九三七年

「兵庫県下藩時代の漁政史料（一—三）」『兵庫史談』六—七—六—九

『兵庫県民俗資料』／一九三二年—一九三五年／兵庫県民俗研究会

一九三二年五月 第一輯

「播州白国村旱魃雨乞願開歌音頭 雨乞唄解題」

「丹波沢田八幡饗切祭」

「播磨飾磨郡置塩郷昔踊歌」太田氏所蔵天明写本、解説

一九三二年六月 第二輯

「文久本 昔踊哥 昔踊解題」名倉家所蔵資料

「兵庫県下の手鞠歌」大阪朝日新聞神戸附録記事より転載、注

「丹波水上郡地方のこと祭り」図あり

「播磨動植物方言抄」

（「夢前川漁獲習俗雑記」『播磨』一九三三年）などに拡大し、踏査の記録も散見する。

最後に、地元の評価では太田は「郷土史研究家として夙に令名あり、ひさしく神戸史談会ならびに兵庫県民俗研究会によつて神戸史蹟の研究紹介に没頭し、その大なる功績斯界の矚目を唆つてゐる隠れた篤学の人」¹⁴であり、「神戸史談会の重鎮、古いことならここへ持つて行けば何でも分るといふ権威者、何か史蹟など発見されると、きつと同君の名が出てゐる」¹⁵という人物であつた。しかし全体の傾向として一九三五年以降『近畿民俗』や『旅と伝説』に発表した論考は初期の郷土史的なものがほぼ見えなくなり、古い文献資料に依拠する手法ではなく、現地調査により精力的に取り組むという姿勢の変化が認められる。

ほぼ同時に、太田は自分の研究の整理作業を始めている。たとえば民謡については、初期から関心を持ち続け、資料の紹介

- 一九三三年七月 第三輯
 「牛に関する方言と俗信」〔播磨飾磨郡置塩村付近〕
 「播磨民謡小記」
 一九三三年八月 第四輯
 「表紙写真説明 豊岡盆踊」
 「但馬の親方子方制度」
 「播磨盆踊に関する一考察」
 一九三三年九月 第五輯
 「北摂鈴蘭台盆踊見物記」
 一九三三年十一月 第六輯
 「淡路由良湊神社の鈴」図と解説
 「播磨神崎郡船津村八幡神社の秋祭と屋台」
 「但馬河すそ祭（予報）」
 「津ノ宮御旅提灯」
 「播磨の秋祭りと屋台」
 一九三三年か一九三三年 第七輯
 「但馬牛と伝説」
 「但馬方言雑俎並補遺」
 「遍臭後気」
 一九三三年二月 第八輯
 「播西摂地方田園関係俚諺」
 「但馬方言雑俎並補遺（二）」
 一九三三年五月 第九輯
 「加古郡加古川町鶴林寺の追儺
 あまこえおどり歌解題（歌詞八集所収）」
 一九三三年九月 第十一輯
 「美囊郡大畑の虫送り」
 「淡路順礼」

や採集の報告など度々発表してきたが、一九三五年十月にその理論化を図り、「今日まで兵庫節に関して発表した小論に対して補正すると共に、研究上の新基礎を」築く研究として、「兵庫節遺存の確認によるその再検討」という一文を発表した⁽¹⁶⁾。そこで従来の民謡研究が「主として史的考察に止つて現代流布の歌謡関係とはあまりふれられなかつた」ことを指摘し、「兵庫節調の実体を把握することによつて」その流行下限や流行地域、変転期等を把握すべきだと指摘し、初歩的な結論を提示している。

また一九三六年の「但馬の親方子方制度」⁽¹⁷⁾においては、三〇年代初期から関心を持ち、折りあつて研究の進捗を報告してきた⁽¹⁸⁾このテーマについて、より精緻な分析がなされている。

「夏の農民と土俗」

一九三三年十二月 第十二輯

「兵庫県採集俚謡文部省報告書」 兵庫県農務課民謡調査記録

一九三四年四月 第十三輯

「古形式をもつ民家津門前田氏邸」

「高砂附近漁撈抄記」

一九三四年十一月 第十五輯

「西神戸における遊戯唄の覚書」

「但馬の民家に関する一統計」

一九三五年五月 第十七輯

写真「わ」と「こぐつ」の説明

「妙法寺の年中行事（一）」

一九三五年十月 第十八輯

「兵庫節遺存の確認によるその再検討」

「葬制雑記」

『近畿民俗』隔月刊／一九三六年～一九三七年／近畿民俗刊行会→近畿民俗学会

「播但山林のたきもん」『ジンキとシラメの話』『近畿民俗』一一一

河本正義、玉岡松一郎と「但馬養父郡大杉村民俗記」『近畿民俗』一一二

「遠州引左郡滝沢村記」『もちやそびの追想』『近畿民俗』一一三

「但馬の親方子方」『近畿民俗』一一四

森下賤男と「播磨奥吉川村若宮八幡宮座」『近畿民俗』一一五

「無足人に就て」『近畿民俗』一一六

「よばし・ひきわり・桜麦」『正月を中心とした食物の調査』『近畿民俗』二一

一

「農業関係俚謡の地域性」『近畿民俗』二二二

『旅と伝説』月刊／一九二八年～一九四四年／三元社

3 郷土から日本へ

太田の活動の背景には、当時全国規模で民俗学の学問組織を樹立しようとして、積極的に動きだした柳田の影響が大きく認められるだろう。兵庫県庁に勤務していた頃、「上京の度毎に時間をつくくつては先生をお訪ねして色々御教へ戴いてゐた様で、帰つてはその時のことを楽しさうに話してゐました」と太田の妻幸子が戦後に回想している⁽¹⁹⁾。

『民間伝承』の第三号（一九三五年十一月）で新入会員として「宮武省三 太田陸郎」の名前が見える。兵庫県では、第一回日本民俗学講習会に出席した西谷勝也、石田太兵衛や、十月七日までに入会した辰井隆、玉岡松一郎、吉井太郎、落合重信、後藤宗弘に続いて、二人は『兵庫県民俗資料』の初期同人の中で一番早く入会した者であった⁽²⁰⁾。

全国に会員を持つ民俗学の中央組織が発

一九三六年 「九州人吉に遭るウンスン歌留多」『旅と伝説』九一二
「名月姫伝説を訪ねて」『旅と伝説』九一六
一九三八年 「撰津、但馬に残る二三の市に就て」『旅と伝説』一一一二

その他（一部）

一九二八年一月十～十四日 「民謡を訪ねて―県下民謡私考―」『大阪毎日新聞神戸版』

一九二八年九月 「播磨国神種発見の銅鐸」『考古学雑誌』一八一九
一九二九年一月 「酒造作業歌」「酒造関係稼人調査」付録、兵庫県学務部社会課

一九三一年 「西撰古謡考稿抄」「民謡レビュー」一二号

一九三二年八月 「淡路由良附近の盆踊」「上方」第二〇号《上方盆踊号》

一九三二年八月 「播磨国飾磨郡置塩村の牛のはなとおし、はなるろ（鼻環）の図」『民俗学』四一八

一九三三年三月 「夢前川漁獲習俗雑記」「播磨」二二二《民俗号》
一九三三年五月 「カウベ風土記」「神戸新聞」

一九三三年七月 「兵庫県の盆踊」「郷土風景」《諸国盆踊号》

一九三四年三月 「丹波沢田八幡豊切祭」「郷土芸術」三二三

一九三四年四月 「姫路藩に於ける救護施設」「方面」

一九三四年八月 「出稼と民謡」「職業紹介」二一八

一九三五年四月 「但馬の横行路」「土の香」一五一

一九三六年四月 「夢前川流域食用植物の方言と俗信」「郷土文化」創刊号

一九三六年八月 「土版塔婆に就いて」「史跡と美術」七一八

一九三六年十一月 「オンザ小記」「民間伝承」二二三

一九三七年十一月 「孝子伝瑣談」「兵庫県社会事業」一一四

一九三八年 「兵庫県農山村食物の二三の事例」「兵庫県社会事業」二二三

出典・諸雑誌、加茂幸男『太田陸郎伝』一九九二年、日本民俗学会編『民俗学関係雑誌文献総覧』一九八〇年などを参照した。

足してから、柳田は早速十月二二日から十一月九日にかけて、長野、愛知、奈良、大阪、京都、滋賀、岐阜、神戸、鳥取など各地に足を運び、各地の民俗研究会や学校などで講演し、地元の研究者と懇談した。

柳田が提唱する「平民の過去を知ること」⁽²¹⁾を目的とする「郷土研究」は、「郷土を研究しようとしたので無く、郷土で或ものを研究しようとして居」り、その「或もの」とは「日本人の生活、殊にこの民族の一团としての過去の経歴」である⁽²²⁾。郷土の歴史を明らかにする郷土史の態度とは大きく異なっている。柳田が民俗学の組織化に積極的であったのは「地方の割拠」を避けるためであり、その働きかけは、郷土研究が最も活発な近畿地方に特に力を入れている。一九三六年一月十七日から二二日にかけて、柳田は木曜会为中心的メンバーである橋浦泰雄、大間知篤三を連れて再び関西に向かい、大阪民俗談話会に出席

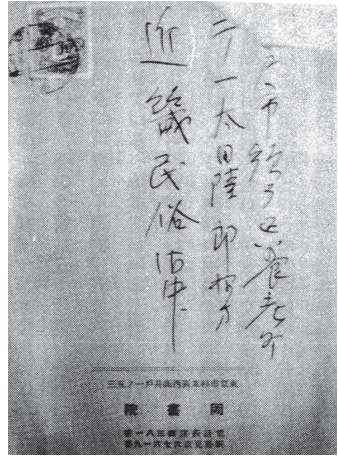


図5 太田陸郎方『近畿民俗』
編集部宛郵便物

出典：加茂幸男『太田陸郎伝』1992年、
35頁。

し、『近畿民俗』の発刊などについて地元の研究者と話し合った。

大阪民俗談話会は『民間伝承』が創刊されてから、誌上に談話会の活動を積極的に報告しているが、一九三六年一月の第五号では、「兵庫県民俗資料が、近畿民俗と改称されて全関西の民俗報告誌と拡張されるにつき太田、河本（兵庫）、水木、藪（大阪）、玉岡、平山（京都）の六氏が編輯委員となり、大阪京都の民俗学徒は全的に支持することになった。この雑誌は逐次近県の同志によびかける考である」と報じている。同号の「近畿民俗刊行会会規抄」によれば、予定された会の活動は「年六回会誌『近畿民俗』を発行し、また講演並に民俗関係図書を刊行」するといふ内容であった。この号では会員二〇人以上の地方では支部の設置が可能とし（「雑報」）、「大阪では支部設置について、早くから熱心でしたが、今回京都、神戸等と連絡を緊密にして近く『近畿民俗』が発刊される事になりました。祝意を表すると共に会員諸氏の御声援を切望します」と記している。柳田の「御尽力と御徳薄」⁽²³⁾の下で京阪神各地方の民俗研究団体が統合されようとしていた⁽²⁴⁾。

太田陸郎の名前が次第に知られるようになったのは、この『近畿民俗』によるところが大きい。彼が中心的な役割を果たした『兵庫県民俗資料』は、当時、まだ広く知られていなかった。たとえば、同じく兵庫県出身で、かつて播磨郷土研究同好会の同人であった玉岡松一郎は、機関誌『播磨』休刊後の一九三五年春、西谷勝也と一緒に兵庫県民俗研究会に加入した⁽²⁵⁾が、その彼でさえ、『民間伝承』一四で同雑誌を紹介するとき、その由来を「もと播磨民俗資料」と間違えたほどであった⁽²⁶⁾。

一九三六年二月、『民間伝承』一六では『近畿民俗』創刊号が紹介され、目録も掲載されている。「寄贈書誌」

の欄に、「近畿民俗 創刊号 神戸市須磨区養老町二ノ一太田方 近畿民俗刊行会」とあり、太田が編集を引き受けていたことがわかる(図5)。この創刊号には、柳田の「成長は自然」を巻頭として、藪重孝、高谷重夫、桜田勝徳、河本正義、宮本常一、小谷芳明など当時近畿地方で活躍している面々の名前が連なり、「地方の会誌がややもすれば陥りやすい仲間うちの道楽誌的傾向を抑えて、つとめて寄稿者の学問的意識をたかめ、言うべくんば学界の中央機関誌ともなるべき意気込み」⁽²⁷⁾が窺える。

一九三〇年代後半から、各地で多くの民俗同好会が組織され、前にふれた岐阜の『ひだびと』(一九三五年一月～一九四四年五月)以外、新潟に『高志路』(一九三五年一月～一九四五年八月)、福岡に『豊前』(一九三五年九月～一九三七年二月)、鳥取に『因伯民談』(一九三六年一月～一九三八年十二月)など多くの民俗雑誌が発行されたが、柳田の関与から見れば『近畿民俗』は明らかに別格である。『近畿民俗』は柳田が『民間伝承』に次いで巻頭文を寄せた雑誌で、また休刊するまで柳田から数多く寄稿されている⁽²⁸⁾。

『近畿民俗』創刊号の巻頭文「成長は自然」では柳田はこう述べている。

是まで人があまり気づかなかつたことは、フオクロア見たいな新しい地方の学問が、首都を中心としなければならぬ理由は一つも無く、又その中心を是非とも一つにする理由も無いことであつた。(中略) 標題は前にも申す如く、現在は思ひ切つて日本民俗資料と改められても、何等の故障もでない時代ではあるが、それではちとばかり大胆過ぎるといふ御斟酌があるならば、やがてはさうする位の抱負の下に、今は先づ近畿といふ程度にまで、領分を拡げて置かれんことを希望する。

当時、柳田は近畿に日本民俗学のもう一つの中心を構想しており、『近畿民俗』に多大な期待を寄せている。その柳田の思いを形にする責任者が太田であつた。『近畿民俗』一六(一九三六年十二月)の編輯後記では、太田は

「前号は近畿二府五県の農山村の小学校に五百部を寄贈することが出来ました。それに添付した共同採集項目『子供組』に就ては予期の成果を得ませんでした。が項目の不適だったためかとも考へます。本号には改めて食物に関する項目を添付して重ねて配布致します」と報告しており、近畿での民俗学中心を建設するための努力を示している。

『兵庫県民俗資料』が停刊してからも、その主体である兵庫県民俗研究会は暫く存在しており、『民間伝承』第六号（一九三六年二月）、第八号（一九三六年四月）での例会報告によれば、『近畿民俗』の編集が大きな話題となっていたことがわかる。『近畿民俗』一―四（一九三六年八月）に「従来ノ名称ハ単ニ雑誌刊行ノミヲ事業トスルノ感アリ」を理由に、近畿民俗刊行会は近畿民俗学会に改名した。以降、兵庫県民俗研究会の名称は見えなくなり、近畿における民俗学の統合が一応の完成を見せたといえよう。

近畿民俗学会の活動は神戸での『近畿民俗』の発行と大阪での連続民俗講習会の主催とに大きく分けることができる。太田は「一方で雑誌の編輯をされつつ、又よくこの会（民俗講習会）にも出て来られて面倒を見て」⁽²⁹⁾いた。日本民俗学の初めての連続講習会は、近畿民俗学会主催・大阪府及び大阪朝日新聞社の後援で一九三六年九月十九日より一九三七年三月二〇日まで二五回にわたって毎週土曜日の午後、懷徳堂において行われており、普通講義の第八講が太田陸郎による「親方子方」であった⁽³⁰⁾。

一方、太田は一九三六年二月、『旅と伝説』（九一二）に「九州人吉に遺るウンスン歌留多」を初投稿し、これより一九四二年亡くなるまで同誌にしばしば原稿を寄せていた。

地方支部の設置やその運営と活動に多大な情熱を注いだ太田は、一九三六年八月頃に民間伝承の会の世話人に推薦され⁽³¹⁾、地方有力研究家の沢田四郎作⁽³²⁾と並んで、近畿での民俗学の組織者という役割が確認された。

以上見てきたように、太田は民俗事象について早い段階から関心を持ち、地方において地道な研究活動を積極的に展開していたが、やがて日本民俗学のもう一つの中心として期待される近畿民俗学会の指導者の一人として自ら

の視野を全国に広げたと理解できる。

ところが、一九三七年六月『民間伝承』二一〇での太田「農業関係俚諺の地域性」(『近畿民俗』二二二)の紹介を最後にして、ほぼ一年間、論文紹介や関連学会活動の報告から、太田の名前が見えなくなった。彼が編集の任にある『近畿民俗』も、これ以降休刊となった。翌年一月になって初めて「発行所を京都帝国大学国史研究室内、近畿民俗学会に移し、年四回の刊行にて、創刊号を本年四月に出すことに略々決定した」(『民間伝承』三一五)とその復刊が報告されているものの、実際の復刊は戦後の一九四九年二月を待たなければならなかった。

今、その理由を明らかにすることはできないが、戦争の進行と役所の事務の多忙などが考えられる。しかし、太田の民俗学に対する情熱は冷めることなく、宮本常一は中国の太田から「近畿民俗の事は気になつて居られた様で、何とかして続刊してほしいといふおたよりもあつた」⁽³³⁾と回想している。

2 「中支」での観察

一九三七年七月十八日、兵庫県郷土研究会の第五回談話会は神戸三菱クラブで開催され、栗山一夫、太田陸郎など六人が出席した⁽³⁴⁾。

『民間伝承』の創刊とほぼ時期を同じくして『兵庫県民俗資料』が停刊し、主宰の太田が近畿地方の中心人物として日本民俗学の全国規模の組織化に取り組んでいたが、民間伝承の会の都市とくに東京を中心とする状況を批判し続けたマルクス主義民俗学者・栗山一夫(赤松啓介)は兵庫県で地域研究的民俗学を試み、兵庫県郷土研究会をつくり、ほぼ独力で機関誌『兵庫県郷土研究』⁽³⁵⁾を発行し続けていた。太田は直接投稿していなかったようであるが、機関誌創刊の二月に娘を連れて、はるばる同研究会が組織した大部村王子での第二回実地演習に参加する⁽³⁶⁾など、栗山の研究会を最初から支持していた。